



「言葉」×人権感覚

毎年12月4日～10日は、世界人権デー（世界人権宣言が採択された12月10日）を記念して「人権週間」となっています（法務省）。本校でも、12月5日(金)に人権集会を開催し、「学級人権宣言」のもとで取り組んできたことの発表や言葉遣いをテーマにした人権劇と意見交流が行われました。

誰もが、いじめや差別のない社会で暮らしたい、いじめや差別のない学校に通いたいと願っていますが、現実はそうではありません。悔しいことですが、これは今の社会を作ってきた私たち大人の責任です。

しかし、これからは皆さんもこの社会を作っていく一員になります。次は、皆さんの生き方が問われます。多様性が求められる現代はそれぞれの生き方が尊重されますが、このことについては次の二つしかないと思っています。

①人権集会の様子▶



いじめや差別を「無くす」生き方がしたいか？

いじめや差別を「残す」生き方がしたいか？

「無くす」か「残す」かに、真ん中はありません。

本年度から募集を始めた人権リーダー（人権守ルンジャー）に、20人（全校生の13人に一人）の応募があり、人権について語り合う中学生集会・文化センターの文化祭・人権集会等で思いを行動に移してくれました。こうした行動は「いじめや差別を無くす生き方」だと、心強く思います。いじめや差別を無くす生き方をしたいと願う人の輪が、もっともっと増え続けることを願っています。

詩人の金子みすゞ（1903-1930）に次の詩があります。

「遊ぼう」というと「遊ぼう」という。
「馬鹿」というと「馬鹿」という。
「もう遊ばない」というと「遊ばない」という。
そして、あとでさみしくなって、
「ごめんね」というと「ごめんね」という。
こだまでしょうか、いいえ、誰でも。

（「こだまでしょうか」より）



投げかけられた言葉に反応するのは「こだま」だけでなく、誰の心もそうだと詩人は言っています。つまり、自分の口から出た言葉は、そのまま自分に返ってくるということです。

自分の言葉を一番近くで聞いているのは「自分の耳」です。そう考えると、あいさつ等の温かい言葉で一番元気をもらっているのは、実は自分自身かもしれません。反対に、人を傷つける言葉を言って、自分自身も傷ついているのではないでしょうか。

「言葉」を通して、改めて人権について深く考えたいものです。